

わが心の
春夏秋冬

潮文社編集部編

わが心の春夏秋冬

生命映えるとき いのち 第一集

わが心の春夏秋冬

平成9年8月15日第1刷発行
平成9年9月15日第3刷発行

編者 潮文社編集部

発行者 小島米雄

発行所 株式会社潮文社

〒162 東京都新宿区市谷田町2-31

電話 03-3267-7181(代)

振替・00140-7-69107

印刷所 図書印刷株式会社

©CHOBUNSHA 1997 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-8063-1316-5

優しさの発見

感動の短歌、俳句をちりばめた珠玉の人間秘抄。

人にそれぞれの夢があり、歎びがあり、苦悩と悲しみと、そして癒しがある。

筆者の皆さんの文章を読んで、改めてそんな思いを深くさせられた。

それにしても、この混沌と頹廢の時代、一步その表層を突き抜けたところには、これだけ清澄な泉が、音をたてて流れていることに心打たれる。

本書のために寄せられた全国の皆さんからの原稿は、二〇三九篇。その中からここには七六篇を採録させていただいた。

九十歳代から十代まで、職業も境遇も体験も多岐多彩で、その一篇一篇が筆者にとっては、いわば、心に刻まれた原風景とも思われるものだけに、鮮烈な印象を受けたのは当然かも知れない。

私達は、平素それと気づかずには大切なものを見過ごし、その前を素通りしていることが多いのではないか。

仏教に諸法実相しよほうじつそうという言葉がある。

真理は目前に、現実の中にあるという。

溪声けいせい是広長舌これこうちようぜつ（谷川のせせらぎも仏の説法）とか、古松こしょう般若はんにやを談だんず（松風の

音も真理を語っている）といった、日常を超えた発想もそこから生まれてくる。

現実の中にあつて、現実を超えた華嚴けげんの世界、まさしく壮大な詩の世界である。ふと、子供の頃聞かされた、花咲爺さんの話を思い出す。

人間の煩惱の象徴とも思える白の灰が、正直なお爺さんの手にかかる、一瞬のうちに満開の桜の花に変貌する。

詩は、私達わたしがふだん見過ごしている、そんな見事な自然、人生の輝きと、その機微きゐに気づいていくところにはじまるといえよう。

金剛の露ひとつぶや石の上

川端茅舎かわうしや

朝露の一粒に天地の生命がきらめいている。何百頁の名作もこの一句の前に脱帽する、そんな名句である。

異色の自由律の俳人にも忘れられない句があつた。

まっすぐな道でさみしい

種田山頭火

目の前一直線に延びた、そんな道に出会った人は多いはずだが、これだけ単純

で、かつ含蓄と余韻に富んだ句は、この放浪の俳人山頭火をまつて、はじめて世に生まれたのである。人によつては、この一句との出会いが、人生を新たに生き直す契機にもなるうかと思われる鮮烈さである。

同じ一本の道とはいっても、全く別な次元において詠まれた短歌もある。

あかあかと一本の道とほりたりたまきわる我が命なりけり 斎藤茂吉

山頭火のさみしい道に対し、これはその対極にあるような輝く生命の道である。

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく 若山牧水

生きたことは決して安直な道ではない。

そこには山があり、谷があり、河が、海がある。しかし峻険な山も、見る時、見る人によつて、山笑う山となり、溪声も広長舌となる。

詩は優しさの発見、人生はそのための旅とも考えられる。生きたことはやはり素晴らしいといいたい。

ここで、全国から原稿を寄せて下さった皆さんに、厚くお礼を申し上げます。

平成九年七月

潮文社編集部

わが心の春夏秋冬／目次

優しさの発見

潮文社編集部

一

華の章

桜前線

大場明日香

一四

四十路の発芽

永江 孝順

一七

やまぼうしの花

下島 範恵

二〇

いぬふぐり

宮原 壽生

二四

夕さくら

人見美枝子

二八

大牡丹

富原 ミエ

三二

醉芙蓉

安原サツキ

三五

とまと

鈴木 久

三八

牡丹浄土

嶋崎 二郎

四一

ロケットに乗って

恩賀とみ子

四五

夢の章

虹

市川美代子

五〇

秋陽

南浜 伊作

五三

いのち点描

たかはし・とみを

五六

遠い謎

佐藤 栄

五九

夢紀行

中条 美穂

六二

生命なりけり

津江 昌武

六五

夢蒼

中澤 萌

六八

彼方に

岡本 怜一

七一

絆の章

寿歌

曼珠沙華

命托して

母よ

妻の介護

母子ぐさ

冬牡丹

母のひとこと

同行二人

形見の時計

旅の章

北京好日

山川勘三郎

山中登久子

岩井 賢郎

石橋 愛子

西岡 孝

田中 はつ

野本 栄子

太宰 信明

折本 吉弥

三村 蘭舟

新崎 晴子

七八

八三

八七

九〇

九二

九六

一〇〇

一〇三

一〇八

一二五

一二三

お四国さん

田村 善伴

一二五

大和路散歩

こすぎあきじ

一二九

白薔薇

矢部 協子

一三五

お花畑

西田 浩二

一三八

川の風景

鈴木太喜雄

一四二

長城の月

六田 正英

一四六

高野山

小谷 正夫

一四九

鳥帰る

佐粧 純男

一五三

幾山河の章

小米桜

久保田貞子

一五八

生きる

福島 末男

一六三

祖国

林 みどり

一六九

大島桜

山中さち子

一七四

回想公主嶺

斎藤 武男

一七九

紙飛行機

矢島 芳子

一八三

夏の日に

浅野道之進

一八六

生かされて

井筒紀久枝

一八九

向日葵

西尾 康人

一九二

酪農兵

鈴木 七郎

一九六

勲章

鈴木 辰蔵

一九八

故郷の章

蓮の村から

野平 和風

二〇二

早春賦

山寺 秋雨

二〇六

ふるさと挽歌

中島 嵩

二〇九

狭間に生きて

むつごろう

精霊とんぼ

海

望郷

廃村の碑

四方田民雄

金子 篤成

水津寿和子

若林 利子

田川喜美子

富澤きよ子

道の章

歌のある風景

枝ごとに

朝の挨拶

女の一生

信濃路にて

高山 れい

須知 良正

羽田野哲郎

寺井 正

勝田 亨

二二三

二二七

二二九

二三三

二三六

二三一

一三六

二四〇

二四三

二四六

二四九

鬼門

路上

初紅葉

老春

宇佐美正治

關根 巧

宮田 硯水

得能 御幸

二五三

二五六

二五九

二六二

祈りの章

杖

姑の胸

月光

夫婦茶碗

妻と共に

白梅

木犀忌

伊与田 茂

高畠 弘子

中島 静美

宇佐美和子

中畦 一誠

荒井 里枝

中原 トミ

二六六

二七一

二七五

二七八

二八一

二八四

二八八

二十歳の巡礼

北田 優子

二九二

幽明

花吹雪 舞

二九七

乳房の祈り

林 いつ子

二九九

カバー装画

高部多恵子

華の章

夜桜の白い波濤はとうに溺れけり

大場明日香

桜前線

大場 明日香^{あすか}

昭和一九年生（東京都）
自営業

わたしにとって桜は、季節が巡れば、咲いてあたりまえ、「春が来たなあ」と思うくらいの花であつたが、満開の桜の木の下で、弁当を広げる家族達の姿は、絵のように明るく楽しく、わたしの目に映つた。花灯りの下で繰り広げられる桜祭りは、母亡き後のわたしにとって、悲しい想い出として残っている。皆にはある母が、なぜわたしにはいないのか。わたしの小さな胸は、桜の花をむしやくしや食べて、泣きたかつた。

そんなわたしに桜の花が生き生きと見え始めたのは、子供が生まれてからであつた。手を叩けば、手の鳴る方にヨチヨチと歩いて、母の胸だけを求めて駆けて来る子の愛しさで、幸せをかみしめていた。

子供がピッカ、ピッカの一年生の時、大きなランドセルの真上で、桜は満開の笑顔で咲き誇り、